高岡短期大学紀要　第16巻　平成13年7月
Bull. Takaoka National College, Vol.16, July 2001

『高岡短期大学紀要』新シリーズの開始にあたって

学長　蝋　山　昌　一

『高岡短期大学紀要』は1990年3月の第1巻以来巻を重ね、昨年の11月には第15巻を発刊するまでに至った。この間、この雑誌は高岡短期大学の研究を世に問うという意義を果たしてきたことは否定できない。さらに、その編集に際しては、掲載論文に学内審査の経由を義務付けるなど、他の大学紀要では例を見ない仕組みが適応され、高岡短期大学の研究水準の向上、維持という点でそれなりの効果をあげてきた。しかし、そうしたプラスの効果の反面、紀要に掲載されるのは型に嵌った発表が可能なものばかりである、といったマイナス面も指摘されるようになった。本来、高岡短期大学は地域に生きる短期の高等教育機関として、いわゆるアカデミズムの枠を超えて知的な活動を展開することが期待される存在である。したがって、その知的活動報告の形式も多様なものでなければならず、また、独善を排し多くの読者を惹きつけなければならないはずである。正直言って、これまでの『高岡短期大学紀要』は多様性、平易性に欠け、地域から読者を得ることはとうてい無理であった。

いま日本の大学は第2次大戦後初めての大きな曲がり角に立っている。国立の高等教育機関である高岡短期大学も安閑としてはいられない。これまでの日本の高等教育サービスは短期大学・4年制大学とに分断されて、担われていた。短期大学と4年制大学との自然な棲み分けが成立していたといってもよい。しかし、現在は大学側と学生側（高等教育サービスの需給）両面で同質化が進行し、その結果として、高等教育サービス市場での競争は激しさを増している。こうした変化の具体的な内容は、①少子化を背景とした高等教育需要の変貌、すなわち、大都市指向・4年制大学指向の高まり。②高等教育機関の側での変化、すなわち、典型的には、とくに4年制大学における実務教育の重視（皮肉を言えば、4年制大学の短大化）である。こうした高等教育サービス市場での競争激化にも関わらず、競争下にある短期大学と4年制大学とではとりうる競争手段の範囲（生き延びるための手段）は構造的に異なり、歴史的に作られたイメージとともに、短期大学のとりうる手段の範囲は4年制大学に比べ、より狭く、不利となっている。

さらに、地方に所在する高等教育機関、とくに短期大学にとっては、①地域社会が十分には成熟していないこと、②とくに近年、地域経済の衰退が著しく、当分は回復が期待できないこと、③これまで大学・短大が地域の中核都市のそのまた中核には位置せず、大学・短大と地域の融合が未完成であったこと等の要因で、いっそう厳しい現実となっている。

こうしたなかで、高岡短期大学はやや恵まれた環境にある。①富山県では、高等教育機関の種類、数が限定されていて、これまでも競争が少なかったし、これからもそう激しくはならないと（何とはなしに）予測されている。②とくに女子の都会指向が乏しく、優秀な女性が集まる傾向はそう簡単には変わらない。③設立の経緯もあり、これまでに日本の高等教育機関としては珍しく、地元との強い結びつきがあり、高岡短期大学としてもそれなりに独自の努力を払ってきた。

しかし、高岡短期大学がこうした環境条件

に甘んじ続けることは許されない。国立大学の独立行政法人化、あるいは、民営化は、当然のことながら、高岡短期大学にも適応されることとなる。こう見てくると、高岡短期大学はどのように細かなところについても地域に生きる短期の高等教育機関として気配り、目配りを忘れてはならない。紀要についても例外ではない。高岡短期大学の構成員が企画し、実践する知的な活動を正直に、丁寧に文字として表現し、地域に役立つ情報としてその活用を期待する。それもまた気配り、目配りのひとつとして位置付けられよう。このような考えから『高岡短期大学紀要』の編集方針を見直し、出来上がったものがこの新シリーズの第1号（通算では第16巻）である。

この紀要に掲載されている論稿のうちタイトル・ページの肩に「―論文―」などと種別の印されているものは、これまでと同じ編集方針で学内での審査を経て掲載されることになったものであり、どちらかと言えばアカデミズム志向が強い。しかし、無印の論文はそれぞれの執筆者が自由に自らの責任でその知的な活動の一端を披瀝したもので、その中には、好評を博した本学主催の講演会の講演録やこれからの万葉線のあり方を提言した論考などが含まれ、きわめて多彩である。本紀要を手にした読者が高岡短期大学の知的な活動に関心を寄せ、本学へのよき理解者となられることを期待したい。

（2001年5月記）